

目

次

はじめに	3
2024 年度 なごや環境大学 森イキ！プロジェクトについて	4

プロジェクト1 山の社会見学

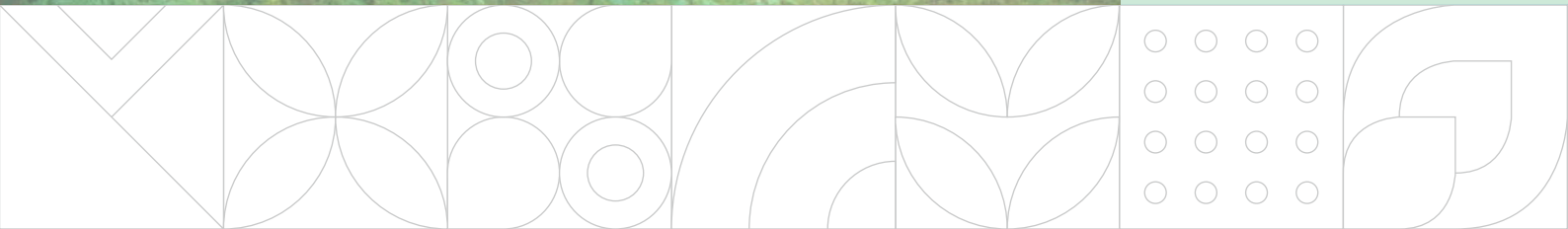
第1回 竹で流しそうめんキットづくり	6
第2回 山のヒノキで草木染め	10
第3回 植樹祭	14
第4回 バターナイフづくり	16
第5回 料理ヘラづくり	20
第6回 原木シイタケづくり	24

プロジェクト2 スキルアップ講座

第1回 森の手入れと安全対策 ～道具の取り扱い～ 実践編	28
第2回 森の案内・歩き方	32

FOREST PROJECT

Activity Report





はじめに

2019年3月「森林環境税及び森林環境譲与税に関する法律」が成立・公布されました。

森林環境譲与税は、市町村においては間伐や人材育成・担い手の確保、木材利用の促進や普及啓発等の「森林整備及びその促進に関する費用」に充てることとされています。

これを受けてなごや環境大学では、森林環境譲与税を活用した「森イキ!プロジェクト」を立ち上げ、名古屋市内や近郊の森で活動が続いている方々といっしょに、それぞれの森の重要性や整備活動、課題解決を体験していただき、継続的に参加する仲間を増やすべく、さまざまなプログラムを計画しています。

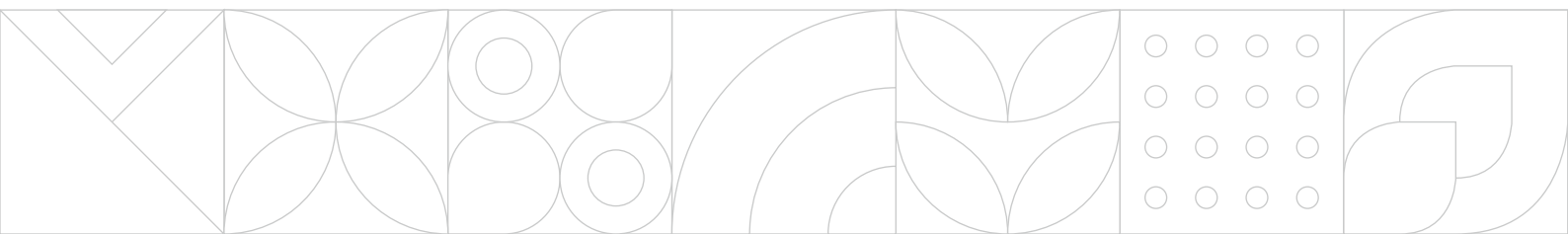
2024年度の「森イキ!プロジェクト」では、「山の社会見学」、「スキルアップ講座」の2つを実施しました。

「山の社会見学」では、岐阜県的美濃市・関市を中心に活動されている皆さんとともに、山の木や竹を使用したクラフトや林業体験を通して、山の自然や、山で活動する魅力を通年で体験していただきました。

また、「スキルアップ講座」では、連携している岐阜県立森林文化アカデミーから講師をお招きし、名古屋市内でみどりの保全活動に取り組んでいる団体等を対象に、森の手入れを安全に行う「森の手入れと安全対策～道具の取り扱い～」の昨年度に引き続く実践編と、森を案内する際の自然観察のポイントを学ぶ「森の案内・歩き方」を開催しました。

なごや環境大学は、市民／市民団体（NPO／NGO）・企業・教育機関・行政が立場や分野をこえて協働で運営し、知識や経験、問題意識を持ち寄って学びあうネットワークとして、「愛・地球博」と同じ2005年に開講し、今年の3月に20周年を迎えました。

「20周年、その先へ!なごや環境大学」は、森林環境譲与税の活用を通じて、市民への普及啓発や人材育成、グリーンインフラの整備など、森林整備の促進に向けた取り組みを実施し、持続可能な社会づくりや新たな人づくり・人の輪づくりに活かしてまいります。





プロジェクト概要

森林での活動や知識・技術の学びを通じて、持続可能な社会づくりや人づくり・人の輪づくりを進めるなごや環境大学のプロジェクトです。名古屋市内や近郊の森で活動をしている方々と一緒に、調査や整備活動を通じて森の重要性や課題解決に向けた取り組みを学び、体験しています。2024年度は、以下2つのテーマのプロジェクトで参加者を募り、講座や体験会を実施しました。

PROJECT **01** 山の社会見学

岐阜県美濃市・関市の山をフィールドに、山を知って、遊び、学ぶ講座。

2024年 8月4日(日)、9月8日(日)、10月19日(土)、11月17日(日)、12月1日(日)
2025年 2月23日(日) 全6回開催

場所 岐阜県美濃市・古城山ふれあいの森、中濃森林組合、和紙の里わくわくファーム
岐阜県関市・富之保の山



竹で流しそうめんキットづくり

山のヒノキで草木染め

植樹祭！

＼ 焚き火をしながら山の木で〇〇をつくろう！ ／



バターナイフづくり

料理ヘラづくり

山の恵みの食 原木シイタケづくり



PROJECT 02 スキルアップ講座

2025年1月26日(日) 場所 戸田川緑地

第1回

森の手入れと安全対策
～道具の取り扱い・実践編～



2025年2月15日(土) 場所 猪高緑地

第2回

森の案内・歩き方



PROJECT 01 山の社会見学

2024年8月4日(日)

第1回

竹で流しそうめんキットづくり

講師 前場 治佳子

場所 古城山ふれあいの森／岐阜県美濃市古川 1733



竹は繁殖力が強く、成長も早いので、竹林を放置してしまうと太陽の光が届かない暗い環境になってしまいます。多様な植物が育つ健全な山の環境を保つためには、竹を定期的に除伐することが大切。今回は伐竹した材料を使っての流しそうめんキットを作ります。



まずは、森に入って伐竹体験を行いました。講師の指導のもと、のこぎりで竹を伐っていきます。周りの安全を確認してから倒す方向を決めて受け口を作ります。追い口は参加者が作りました。ナタで竹の枝を払い、1m ほどに切り分けて作業場まで運びます。



作業場に戻り、流しそうめんキットづくりをスタート。両刃のナタと木槌を使い、二人一組で作業を進めます。まずは講師のデモンストレーション。竹の真ん中にナタを入れて木槌で叩きながら下まで二つに割ります。



竹を二つに割った後、節をハンマーで叩いて落とします。節の残りはクラフトナイフを使って削ります。ここがそうめんを流すパーツとなります。少しだけ節を残しておくことで流れてきたそうめんを箸ですくいやすくなります。削りすぎるとそうめんが引っかからず流れてしまうため、ほどよく残しましょう。





続いて、流しそうめんキットの三脚を作ります。太い竹は 6 等分、細い竹は 4 等分して縦に割っていきます。三脚の節は取らずに進めて OK です。



同じ幅に割った竹に電動ドリルで穴を開けます。割った竹 3 本をワイヤーでつなぐと三脚となります。これを 3 セット作って、流し台を乗せて傾斜を作ります。三脚の高さは、脚の開き具合で調整可能です。



めんつゆを入れる器と竹箸も作りました。器は竹を輪切りにして、節の部分を底に使用します。竹を細く縦に割って、長さを調整しクラフトナイフで削ったら箸の出来上がりです。

自分たちで作った流しそうめんキットに参加者は大喜び。さっそく自宅でバーベキューをしながら流しそうめんをする計画を立てている家族も。最後に参加者で記念撮影。



PROJECT 01 山の社会見学

2024年9月8日(日)

第2回 山のヒノキで草木染め

講師 前場 治佳子

場所 古城山ふれあいの森／岐阜県美濃市古川 1733
和紙の里わくわくファーム／岐阜県美濃市藤生 1647



山を散策し、染める原料となるヒノキの葉を集めて、草木染めを行いました。



まず、ヒノキの葉についてレクチャー。スギやマツの葉との違いを学びました。ヒノキの葉は枝分かれており、先端が丸いのが特徴。ヒノキは煮出しやすく、焙煎を重ねると色が濃くなります。



参加者は、実際に山へ入って、ヒノキに触れ、匂いを嗅いで集めました。幼木のヒノキもあり、古城山の散策を楽しみながら子どもたちも葉を採取できました。



ヒノキの葉を採取したら、美濃和紙の里にある「和紙の里わくわくファーム」へ。
まずは、草木染めの説明を行いました。草木染めで準備するもの、植物の注意点、
染める素材の注意点、下処理や染料・媒染液の作り方、手入れの仕方などです。



説明の後は、ヒノキの剪定を行いました。採取した枝
から葉を切り取りました。今回は材料として各 500g
用意しました。枝の先端の方の葉で染めると鮮やかに
染めることができるというアドバイスも。



葉っぱを水洗いして洗濯ネットに入れて、
お鍋で煮出します。今回は、ふたをして中
火で 40 分煮ました。





ヒノキの葉を煮出している間に手ぬぐいの模様を作りました。輪ゴムやビー玉、割り箸に洗濯ばさみなど、さまざまな道具を活用します。講師の作品を参考に、参加者は「どんな模様になるのかな？」と想像力を働かせます。輪ゴムでつまんだ部分を縛ったり、折りたたんだ部分を挟んだり、独自の模様を作ることに挑戦。

今回染めたのは綿の手ぬぐい。下処理として、豆乳に漬けて乾燥させています。

草木染めの 素材

下処理が必要

- ・ 麻（リネン）
- ・ 綿（コットン）
- ・ 葛布
- ・ 竹（バンブー）

下処理が不要なものが多い

- ・ 絹（シルク）
- ・ 羊毛（ウール）
- ・ 山羊（カシミア）

染まらないもの

- ・ 化学繊維（ポリエステル、アクリルなど）



模様作りが終わったら、ヒノキの葉のエキ스로染めます。今回、色を定着させるための媒染液にはミョウバンを使用。着色と媒染は２セット行いました。

輪ゴムや割り箸などをほどいたら、ヒノキの葉で淡い黄色に染まった模様が浮かび上がりました。参加者のオリジナル作品とともに記念撮影！



草木染めの材料



黄色 オレンジ

・みかんの皮 ・春菊
・玉ねぎの皮 ・ターメリック



黄緑 緑 薄緑

・ヒノキ ・スギ ・そば豆のさや
・ヨモギ ・笹 ・落葉した葉



ピンク 紫

・ナス ・アボカド
・赤しそ ・黒豆

・サクラの枝
・そば豆の薄皮

・ぶどうの皮 ・びわの葉
・紫キャベツ



青

・ナス ・クサギの実
・紫キャベツ ・藍（あい）



茶色

・コーヒー ・ルイボスティー
・紅茶 ・栗（渋皮、イガ）



PROJECT 01 山の社会見学

2024年10月19日(土)

第3回 植樹祭

講師 前場 治佳子

場所 中濃森林組合／岐阜県美濃市長瀬 427-8



植樹体験を通じて、山の成り立ちや環境を知ります。生憎の雨模様でしたが、集まった参加者で植樹にチャレンジしました。



植樹場所は美濃市の山の麓。初心者でも植えやすい平らな土地です。斜面にはすでに植樹をされた苗がずらっと並んでいました。苗は山栗です。山栗が大きく育ち実をつければ、野生動物の食料になります。



最初に植樹のやり方を教わりました。鍬（くわ）で20センチくらいの穴を掘り、ポットから取り出した苗を植えます。ポットから取り出したら根の部分をほぐす事がポイントです。



苗を穴に置いたら土をかけて踏み固めます。次に食害防止のカバーをかけるための支柱を立てます。カバーをかけ、それを結束バンドで留めたら植樹完了です。

食害防止のカバーをつけないと、あっという間にシカなどの野生動物に食べられてしまいます。植樹した苗は栄養豊富な環境で育てられており、かつ柔らかくておいしいので野生動物に狙われやすくなります。



実際に植樹してみると大変な作業。穴を掘ったり、支柱を立てたり、力が必要な作業が続きます。支柱は竹でできており、真っすぐ立てるのに難航しました。



雨がしとしと降る中、参加者みんなで協力し、27本の苗木を植えることができました。3歳の女の子の参加者も、一生懸命にお手伝いをしていました。



PROJECT

01 山の社会見学

2024年11月17日(日)

第4回

バターナイフづくり

講師 長屋 紀子

場所 古城山ふれあいの森／岐阜県美濃市古川 1733



今回は、材料の調達の方法から鉋（なた）の使い方、ナイフを使う手の動かし方を学び、自分で作るオリジナルのバターナイフづくりにチャレンジしました。



まず、山の中へ向かいました。斜面に立っている一本のソゴを実際に伐り倒す手法を学びました。再び芽を出せる（萌芽）ように高さ 15cm くらいで切ります。受け口があるとゆっくり



倒れるので、倒す方向に受け口を作ります。手ノコギリで受け口を作り、追い口を入れて切り倒しました。



伐ったソゴの枝を切り落とし、バターナイフの材料にしました。ソゴは美濃の山の中にたくさん生えている身近な広葉樹です。常緑樹であり、葉っぱ縁が少し波打っているのが特徴です。



松ぼっくりをリスが食べ残した
「森のエビフライ」も！





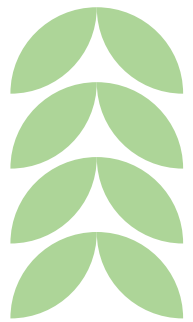
作業場に戻り、バターナイフの素材を選びました。森で調達したソヨゴ以外にも、ホオノキ、リョウブ、アラカシなど数種類の樹種から選びました。



ホウノキは比較的やわらかく、クラフトナイフで削りやすいです。子どもにもオススメの素材です。一番硬い素材はアラカシです。リョウブは、鹿の大好きな木で皮を剥ぐのだとか。

素材を選んだ後は、のこぎりで15～20センチ程度の適当な長さに切りました。





続いて、ナタで木を縦に割ります。台を置いてナタで割る際、木槌で叩きます。最初は軽く叩いて、刃が入ったらしっかりと叩きます。木の繊維が曲がっていたり、節があったりなど縦に真っすぐ割るのは簡単ではありません。節のねじれは削り取ります。



半分に割った木をナイフで削ります。ナイフの使い方はしっかり説明。ナイフを使う際は互い違いに座り、隣の人と手が触れ合わない距離で扱うなどの注意事項もありました。



両側からイメージするバターナイフの形を描いて削ります。木には順目があり木の目に沿う、削りやすい方向があります。逆目は木の目に沿っていない方向で、刃が食い込んでしまうので注意が必要です。

また、夏目、冬目という木目があり、成長が大きくやわらかくて白っぽい夏目、成長が遅く固い冬目という違いについての説明も。木目によってナイフの握り方や動かし方が変わります。



削ったバターナイフは、持ち帰ってから1～2週間ほど日影で乾かしてからヤスリをかけます。紙ヤスリの150番、240番の順番にかけて滑らかにします。仕上げに、クルミやエゴマのオイルを塗ります。



さまざまな形や表情、皮の残し方など個性豊かなバターナイフが出来上がりました。自ら作った作品を手にして記念撮影！



PROJECT 01 山の社会見学

2024年12月1日(日)

第5回 料理ヘラづくり

講師 長屋 紀子

場所 古城山ふれあいの森／岐阜県美濃市古川 1733



今回は、第4回と同様に森で材料を調達し、鉋（なた）とナイフを使って料理ヘラを作りました。バターナイフよりもレベルアップしたクラフトワークです。



最初に山で落葉の広葉樹であるコナラの木を調達しました。前回同様、材料となるコナラの木を伐木しました。木の重心に逆らわずに受け口を作って、ゆっくり倒れる方向を確認しながら伐ります。地面に接地したことを確認したら、玉切りをして作業場まで運びます。



名古屋市の木でもあるクスノキ



街路樹で多く見かけるナンキンハゼ



樹皮が特徴的なヤマザクラ



新芽は山菜として食べられるリョウブ

作業場に戻り、料理ヘラの素材を選びました。コナラ、クスノキ、ナンキンハゼ、ヤマザクラ、リョウブの特徴を聞いてから、参加者それぞれ使う木を選びました。



料理ヘラは削る部分が多いため、まずは鉋（なた）で成形します。ナタで少し傷をつけて、万力で木を割ります。もう一度割って、厚さ 2cm くらいの板材を作ります。





鉋（なた）で粗削りした板材をナイフで形を整えます。柄（え）の部分から削り出します。逆目ではなく順目（ならいめ）にして削るとスムーズです。モーラナイフ（両刃）の使い方や肘を使うナイフワークについても学びました。柄の握り心地、ヘラ先の形や厚みなど、思い通りの料理ヘラに仕上げていきます。



子どもたちは、子ども用ナイフや紙ヤスリを使って削っていきます



この日は、昼食に芋煮を頂きました。メニューは、かまどで炊いたご飯にお漬物、芋煮。参加者たちが囲む焚き火では、焼きマシュマロを楽しむ子どもたちも！



1日かけて制作し、個性豊かな料理ヘラが出来上がりました。皆さんの作品、樹種による色味や質感の違いも観察。1週間～2週間ほど風通しのよいところで乾燥させてから紙やすりで削って完成です。



それぞれが作った料理ヘラを持って記念撮影。一日おつかれさまでした！



PROJECT 01 山の社会見学

2025年2月23日(日)

第6回 原木シイタケづくり

講師 長尾 嘉市

場所 関市 富之保の山



今回は、山の恵みを「食」で感じる企画として、原木シイタケづくりを行いました。原木が育つ山とシイタケが育つ「ほだ木」の見学、自ら穴を開けて植菌をして原木シイタケづくりに挑戦しました。

講師は、中濃森林組合
代表理事組合長の長尾
嘉市さん



関市の山に囲まれた「円空堂」という集会場で作業を行います。まずは講師である長尾さんが所有する山を散策しました。スギやヒノキを育てる小規模林家の長尾さんは、所有している山から原木を切り出し、シイタケづくりを続けています。



11月半ばに菌を打つヒラタケの原木も。菌を打って自然発生させている

シイタケの原木が育つ山へ入りました。森の樹種についての解説や「山は管理しないと樹相が変わってしまう」という説明もあり、自然との関わりを考えながら林道を歩きました。山には紙垂（しで）のついた木の枝も。これは原木を調達した場所に添えられています。



山から戻りシイタケの育つ「ほだ木」(シイタケの菌床となる木)も観察しました。井げた状に組まれた木は木口が白くなっており、木に菌糸が木にまわっている様子を観察できました。また、屋外でのシイタケ栽培ではサルによる獣害被害は避けられないという現状も伺いました。



小さなシイタケを発見して、はしゃぐ子どもたちも

ビニールハウスの中にはストーブの上に鍋が置かれ、寒さの厳しい冬でも暖かい空間を保ちながら湿度と温度を管理しています。

長尾さんは、山の木を伐って 90cm の原木にして、シイタケを栽培。道の駅・平成の朝市で販売しているそうです。

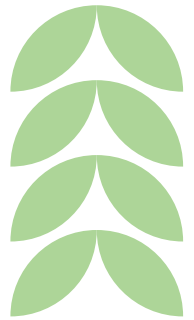


菌を打った原木は、11月の終わりに水槽に1日浸して、菌に刺激を与えてからシイタケを発生させています。2週間ほどで芽が出て切り口が白っぽくなったら菌が回った証拠。菌打ちは4月までに完了します。



いよいよ原木シイタケづくりのスタートです。それぞれが菌打ちをする原木を選んで、作業場となる円空堂へ運びます。





最初は、ドリルのパワーに戸惑う参加者もいましたが、終盤には慣れた様子で作業が進みます



次に、原木に電動ドリルで穴を開けます。ドリルの使い方の説明後、各々で練習をしたら、慎重にまっすぐ穴を開けていきます。穴を打つ間隔は、原木を縦に4等分し、その線状に6個ほど。続いて、開けた穴に互い違いにして5個開けていきました。



おが屑とシイタケ菌が混ざっている状態



原木の穴にシイタケ菌を埋め込んでいきます。穴の奥に少し隙間を作って菌を埋めて、発泡スチロールで蓋をしました。



ほど木が完成。持ち帰った後は風通しの良い日陰に置き、立てかけたり、枕木を置いて、直接地面に着けずに管理するのがポイント。家の中には置かず、雨が当たる場所も良いそうです。シイタケが収穫できるのは約1年半後。2～3年ほどは収穫できるそうです。



菌打ちをした原木を持って記念撮影。
シイタケを食べるのが楽しみ、という声も！

PROJECT **02** スキルアップ講座

2025年1月26日(日)

第1回

森の手入れと安全対策 ～道具の取り扱い～

実践編

講師 ▶ 岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 新津 裕

場所 ▶ 戸田川緑地／名古屋市港区春田野



森の手入れを安全に行うには？今回は、戸田川緑地の森で実際に道具を使い、安全な作業の仕方を学びました。

講師は、岐阜県立森林文化アカデミー准教授の新津 裕さん



名古屋市港区の戸田川緑地で講座を行いました。戸田川緑地は、「健康とスポーツの里」をテーマに整備が進められた、名古屋市の南西部で最大規模の公園です。戸田川の両岸に南北約2.5kmにわたり広がっており、防災拠点も兼ねています。



木枝をまとめた堆肥場「バイオネスト」鳥の巣のような形状になっている

まずは「なごや西の森づくり」事業によって整備された森に入って散策しました。アベマキ、ムクノキ、アラカシが多く、木の間隔が狭く混み合っています。木の根が張り過ぎて新たに植えても育ちににくい環境になっており、適切に伐らないと木が弱ってしまいます。



今回は、アバマキの木を伐ります。木を伐る時に大事なことは「観察」をすること。木が生えている場所と状況、周りの環境をしっかり把握します。これらの確認を怠ると事故が起こるので、参加者とともに観察を行いました。



伐る木の樹高を検証する



木を伐る際に観察すべきポイント

どれくらいの高さなのか？	木に触れる、木のふもとで見上げる
どの方向に倒すのか？	他の木と接触しているか？干渉している木はあるか？ (かかり木など、他の木に寄りかかって引っかかると処理が難しいので注意)
周りの木の状況は？	傷つけてはいけない木、守るべき木はあるか？
木の傾斜はあるのか？	重心を動かすのは難しいので、あらかじめ傾きを確認する
木がどこまで届くのか？	危険なエリアを把握する (樹高の目安→腕の長さと同じ棒を垂直に持ち、木が重なる位置)
倒した後に活動がしやすい場所は？	倒れる可能性があるエリアは、立ち入り禁止区域にするなどの配慮を



大事なことは想像力（木の動き、伐った後の状況など）

良いことだけでなく、ネガティブなケースも可能性を考える





道具の選定も重要。道具がないのに無理をするのは非常に危険

参加者全員で木の観察を行いました。公園内なので立ち入り区域エリアも十分に確保し、アベマキの木を伐っていきます。

まずは、引っかかる可能性のあったエノキの枝を伐りました。高枝ノコギリで枝の下部に切り込みを入れて枝を落とします。倒れる方向にあるコナラも伐りました。



タイミングを合わせて、ヨイショという声とともにぐぐーっと引っ張る

伐る木にロープをかける

滑車で倒れる方向を変え、安全を確保する。

倒す方向にノコギリで受け口を作る

ノコギリを押し切。追い口は、木の直径の10分の1くらいを残しておく（切りすぎない）

ロープで引っ張る

木に受け口と追い口を作ったら、10人ほどで木の動きを見ながらロープを引っ張る。



無事に木を伐り倒すことができました。他の木に触れながら倒れた場合、時間差で折れた枝が落ちてくる可能性があるため、木が倒れてもしばらくは近付かないようにします。上部を確認してから次の作業を行います。

伐る前に想像したシミュレーションとの検証も行います。今回の樹高は16mでした。検証した内容を踏まえたデータが次につながる有益な情報となります。



倒した木の枝を払って作業完了です。ノコギリの正しい刃の使い方にもレクチャー。姿勢、ノコギリの角度、長いものを切る場合のコツ、ノコギリの刃が木に挟まらないようにする方法なども学びました。



まとめ

木を伐るまでの準備（道具、心）と観察、想像力が重要



PROJECT 02 スキルアップ講座

2025年2月15日(土)

第2回 森の案内・歩き方

講師 岐阜県立森林文化アカデミー 教授 柳沢 直

場所 猪高緑地／名古屋市名東区猪高町



名古屋市で市街化が進む中で残された貴重な雑木林を有する猪高緑地。66haと広大な面積はため池が点在し、多くの生きものが生育・生息しています。今回は名東自然倶楽部の皆さんとともに猪高緑地を歩き、森を案内するための自然観察のポイントを学びます。

講師は、岐阜県立森林文化アカデミー教授の柳沢直さん



今回のフィールドの猪高緑地はかつて里山だったエリアです。そのため、起伏に富んでおり、多様な植生が見られ、雑木林の四季の変化を楽しむことができます。

まずは、講師から「自然観察のポイント」を学んでから散策スタート。出発地点である森の集会場の近くの植物を観察しました。

自然観察のポイント

- 1 自分が興味のあることをインプットして解説する
- 2 どんなテーマで散策するのか
- 3 できるだけこの場所特有のものを伝える

森の 集会場



鳥が種を運ぶセンダンの実 「鳥はどんな種子を運んでいる？」というテーマで話題が広がります



赤い実がつくクロガネモチ 実がなる木の違いについて学びました



竹林ではマダケ、ハチク、モウソウチクの見分け方について学びました



歩きながら高低差のある地形、猪高緑地のさまざまな地質について考えました

井堀の 大クス



胸高幹周囲長・約 4m の井堀の大クスを観察しました。クスノキは 1972 年に名古屋市の木として選定されています。クスノキは、それだけでは林をつくれない樹木であり、林が作れるのはこのあたりでは、マツ、ブナ科（カシ、アベマキなどのナラ）の樹木だけと学びました。林のてっぺんを構成する樹木は入れ替わっていきませんが、植生の遷移が進むと常緑の広葉樹（カシ、シイ、クスノキ、タブノキなど）が林のてっぺんを構成して、比較的安定した極相林となります。



井堀上池
・下池



井堀上池や下池は、かつて谷にあった多くの棚田をまかなう水源でした

井堀の
棚田



2001年に復元された棚田を観察。地元の市民グループが水の出入り管理や草刈を行い、田植えや刈り取りなどを行っています





高い標高の場所にも石が出る礫層がある。石の角が丸くなっており、ここはかつて川の底だったことが分かる

猪高緑地のエリアは、場所によっては粘土層、シルト層、礫（レキ）層など複雑な地層で形成されています。層によっては水が通らないため、ため池を作るのに活かされていました。



ハンノキ湿地は、以前は西堀池を水源とする田んぼでした。谷の水が集まる湿った土地で、季節や雨の量によっては池になることもあります。



まとめ

**猪高緑地は、名古屋の中でも
貴重な多くの生き物が暮らす場所**

カエルや水生昆虫などの生き物が暮らすには、田んぼと林、田んぼとため池がセットが必要です。里山で暮らすオオタカはアカマツで営巣し、狩りは平地で行います。様々な環境をセットで利用しているのです。このように里山はたくさんの生き物が暮らし、生物多様性を維持できる場所なのだと理解できました。





なごや環境大学

なごや環境大学 森イキ！プロジェクト 2024 年度活動報告書

なごや環境大学 森イキ！プロジェクトチーム

2025 年 3 月発行

編集・発行「なごや環境大学」実行委員会

〒460-0008

愛知県名古屋市中区一丁目 23 番 13 号

伏見ライフプラザ 13 階

TEL 052-223-1223



<https://www.n-kd.jp/>